



平和行動特集 ～戦後80年・平和を考える～

2025年、私たちは「戦後80年」という、極めて大きな歴史的節目を迎えました。

この「80年」という数字の前には、単なる時間の経過だけでは語り尽くせない、重層的な想いと現実が横たわっています。焦土と化した国土の中で、塗炭の苦しみを味わいながらも歯を食いしばり、奇跡的な復興を成し遂げた先人たちの血の滲むような努力。二度と惨禍を繰り返すまいと心に誓い、平和国家としての歩みを模索し続けてきた道のり。そして今、戦争のリアルな記憶を持つ世代が去りゆく中で、世界では戦争や紛争が絶えない現実直面している私たち。

この重要な年にあたり、私たちは一旦立ち止まり、過去80年が積み上げてきた光と影を直視し、平和の尊さを再確認するだけでなく、現代、そして未来に向けてその意義を多角的な視点から問い直すことが求められているのです。

連合は、平和運動に積極的に取り組み、世論を巻き起こし、地球規模での“絆づくり”を進めることで、平和で安定した社会・暮らしの実現を目指しています。私たち印刷労連も賛同し、これからも平和運動に積極的に取り組んでまいります。

2026年核兵器不拡散条約 (NPT) 再検討会議に向けた「核兵器廃絶署名」の取り組みへのご協力をお願い

連合では、2025年戦後・被爆から80年の節目において、平和の尊さや戦争の悲惨などを次世代に継承すべく、核兵器廃絶と恒久平和の実現に向けて、平和運動を展開しています。印刷労連としても賛同し「核兵器廃絶署名」の取り組みを実施しております。組合員の皆さま、ご家族含めてご協力をお願いいたします。



こちらから
簡単に署名できます！

連合「平和4行動」とは？

連合は「平和は最大の福祉であり、労働運動の原点」という理念を掲げており、その具体的な実践として、日本の戦争被害を象徴する4つの地域・時期に合わせて、毎年大規模な平和行動を展開しています。

これを「平和4行動」と呼んでいます。

第二次世界大戦における日本の悲劇的な経験（地上戦、原爆投下、戦後の領土問題）を風化させず、次世代へ継承し、核兵器廃絶と恒久平和の実現を訴えることを目的としています。

具体的な4つの行動

具体的な平和4行動の内容は以下の通り。

平和行動 in 沖縄 	第二次世界大戦末期、沖縄は「鉄の暴風」と称される米軍の猛烈な攻撃に晒され、3ヶ月に及ぶ凄惨な国内唯一の地上戦の舞台となった。逃げ場のない島で住民を巻き込んだこの戦いにより、約20万人もの尊い命が奪われた。その内、沖縄出身の犠牲者は約12万2,000人に達し、全体の約65%を占めた事実の重みは計り知れない。この癒えぬ悲劇を二度と繰り返さないため、組織的戦闘が終結した6月23日を「慰霊の日」と定め、人々は深く祈りを捧げる。不戦の誓いと平和の尊さを心に刻みます。
平和行動 in 広島 	第二次世界大戦末期の1945年8月6日午前8時15分、広島の上空で一発の原子爆弾が炸裂した。人類史上初めて実戦使用された核兵器は、一瞬にして都市を壊滅させ、数えきれない尊い命を奪い去った。その年の暮れまでに約14万人が犠牲となり、生き延びた人々も、放射線による深刻な後遺症や心身の深い傷に今なお苦しめられている。「二度と同じ悲劇を繰り返してはならない」という切なる願いと共に、核兵器廃絶と恒久平和の実現を使命を担っている。
平和行動 in 長崎 	広島の惨禍からわずか3日後の1945年8月9日午前11時2分、米軍は長崎にも原子爆弾を投下した。山に囲まれた地形が被害を複雑にし、約7万4,000人もの尊い命が奪われ、約7万5,000人が傷ついた。生き残った人々も、放射線による深刻な後遺症や癒えぬ心の傷に、今なお深く苦しめられている。人類史上二度目の、そして「最後の被爆地」であるナガサキは、その責務として世界へ発信を続ける。平和への切なる祈りを込め、核兵器の完全廃絶と、二度と同じ惨劇を繰り返さないよう、力強く訴え続けている。
平和行動 in 根室 	北方四島（歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島）は、日本固有の領土である。しかし、第二次世界大戦が終結した直後の混乱に乗じ、ソビエト連邦が武力侵攻し、島々を強制的に占拠した。先祖代々この地で暮らしてきた約1万7,291人の日本人島民は、着の身着のまま故郷を追われるという悲劇に見舞われた。以来、長きにわたりソ連、そして現在のロシアによる不法占拠が続いている状態だ。北方領土の返還と日ロ平和条約の締結が実現しない限り、私たちにとって真の「戦後」の終わりはなく、真の平和も訪れない。

印刷労連が取り組むべき「平和行動」とは

平和に対する考え方は「個人」「組織」「産業」「地域」など、様々な想いがあります。連合も様々な組織や団体、労働組合と協同しながら行動に取り組んでいます。

印刷労連も連合に同調し共に行動していますが、それは世論喚起や国政への訴え、また恒久平和を願う様々な人たちの想いを伝えることが役割です。

情報や文化を記録し、「伝える」ことを使命とする産業に身を置く私たちだからこそ、果たせる役割があります。それは、単に集会へ動員することではありません。世論を喚起し、国政に対して平和の尊さを強く訴えていくこと。そして何より、恒久平和を願いながらも声を上げられない、数多くの人々の切なる想いを代弁し、社会全体へ「伝える」ための架け橋となることです。

この平和行動は、参加して終わりではありません。そこからが始まりです。

2025連合平和4行動 活動報告

平和行動 in 沖縄



沖縄にここまで戦争の名残が生々しく残っているとは思わなかった。戦地に残る悲惨さを実際に見て自分自身で感じることができた。今後一人でも多くの人に戦争の悲惨さ平和の大事さを伝えていきたい。

トッパン・フォームズ
フレンドシップユニオン
富田 修士

平和行動 in 広島



今でも原爆投下によってつらい思いをしている方がたくさんいることを認識した。今後も体験者が亡くなっていくことに対して、記憶を歪ませることなく、継承していくことの必要性を強く感じた。記憶の継承に関しては、広島の高校生には、感動させられ、頼もしく感じた。

TOPPAN クロレ労働組合
秋谷 哲

平和行動 in 長崎



長崎平和推進協会継承部会の羽田麗子さん(被爆当時9歳)より被爆当時の長崎の様子を伺った。全身に火傷を負った人や、背中一面にガラスの破片が突き刺さった人などの姿を、目を閉じて当時を思い出しながら鮮明に語られていたのが大変印象的だった。

リーブルテック労働組合
西 幸男

平和行動 in 根室



「人が変えたことは人が変えられる」という言葉や、「希望の灯を消さない」ための粘り強い努力が印象的でした。領土問題は北方領土だけでなく全国的な課題であり、多くの人が意識を持ち続けることが必要であり、平和と返還への願いを多様な世代が共有し、運動を続けていくことの大切さを強く感じました。

TOPPAN 労働組合
渡邊 秀和

印刷労連オリジナル平和行動 in 東京

印刷労連_教育広報委員会の運動方針において「中小構成組織における教育機会を増やすべく、教育の観点から平和行動への参加を中小構成組織に展開するべく検討を進める」としており、今回初めてオリジナルの平和行動として東京で実施しました。連合平和4行動に参加が難しい中小構成組織の方々にも平和学習の機会を創出することができました。

日時：2025年8月31日(日)

訪問先：平和祈念展示資料館～帰還者たちの記憶ミュージアム～(東京都新宿区)

領土・主権展示館～北方領土・竹島・尖閣諸島の領土問題について知る～(東京都港区虎ノ門)

終了後は、会議室にてワークショップを開催し、それぞれ感じたことなどを共有しました。



参加者からは、

- ・集団で行くことにより一人で行くより理解が深まった。
- ・学芸員・説明員の案内が非常に丁寧で、パネルや文章だけでは伝わらないことも十分に理解できた。
- ・連合平和4行動とはまた違った経験となり有意義だった。

などのお声をいただきました。

知って防ごう あなたの身近に潜む 解決しよう

マネートラブル



特設サイトで動画をチェック！
https://all.rokin.or.jp/money_literacy/



R3 うさぎん

「もしも」に備え
「もしも」を防ぎ
「もしも」に向き合う。

「みんなでたすけあい、豊かで安心できる社会」の実現に向け、
皆さまとともに取り組んでいきます。



公式キャラクター
ビットくん

たすけあいの輪をむすぶ

こくみん共済 全労済

「こくみん共済 coop」は営利を目的としない保障の生協として共済事業を営み、相互扶助の精神にもとづき、組合員の皆さまの安心とゆとりある暮らしに貢献することを目的としています。この趣旨に賛同いただき、出資金を払い込んで居住地または勤務地の共済生協の組合員となることで各種共済制度をご利用いただけます。

【編集後記】 ～終わらない戦争と向き合って～

戦後80年という大きな節目を迎えた今年、私は沖縄で行われた平和行動に初めて参加する機会を得ました。出発前は「歴史を学ぶ」という気持ちでしたが、この旅は単なる学習の場にとどまらず、私の平和への意識を根底から揺さぶる、人生の転機とも言える体験となりました。

特に、フィールドワーク中にピースガイドの方が語った「まだ、戦争は終わっていない」という言葉。その重みは、現地の風を肌で感じて初めて理解できました。ジュゴンが棲むと言われる息をのむほど美しい海で強行される基地建設、会話を遮るように頭上を切り裂く戦闘機の轟音。それらを目の当たりにした時、ガイドさんの言葉は重い現実となって私に突き刺さりました。これまで「戦争は遠い昔に終わった教科書の中の話」と漠然と捉えていた自分の無関心さが恥ずかしくなり、沖縄は今なお戦争の傷跡と向き合い、日本の安全保障という名目の下で過重な負担を背負い続けているのだと痛感させられました。

圧倒的な現実を前に、「自分一人に何ができるのか」と無力感に苛ま

れ、立ち尽くしそうになった時です。初日の集会で会場全体に響いた「微力だけど無力じゃない!」という合言葉が、私を支えてくれました。美しい自然と過酷な歴史が混在する沖縄で、平和は決して当たり前のものではないと知った今、この言葉は暗闇を照らす希望の灯火です。

沖縄から戻り、受け取ったバトンの重さに戸惑い、どう周りに伝えていけばいいのかわからずいた矢先、この「ネットワーク」の編集という機会をいただきました。私はこの偶然を、平和のための「行動」の第一歩だと捉えています。今回の経験で得た鋭い痛みと問題意識を、一過性の思い出しにしません。まずは自分自身が学び続け、ペンを通じて発信し続けること。「微力」ではあっても、それが誰かに届けば決して「無力」ではないという確固たる信念を持ち、平和な社会の実現に向けて、ここから着実に歩みを進めていきたいと思います。

教育広報委員会 新井 裕司